

第Ⅱ章 位置と環境

1 地理的環境

調査地は兵庫県淡路市釜口字松原 1191 番地 1 に位置し、弥生時代から中世の遺跡である松原遺跡にあたる。瀬戸内海東端に浮かぶ淡路島は瀬戸内最大の面積を有し、南北約 55km、東西約 28km の本島とその南約 4 km に浮かぶ外周約 10km の沼島からなる。本島の東は大阪湾、西は播磨灘、南は紀伊水道に面し、本州とは明石海峡および紀淡海峡、四国とは鳴門海峡によって隔てられる。これらの海峡を挟んで摂津、河内、和泉、播磨、讃岐、阿波、紀伊などの地域が存在する。本島南部には標高 608 m の諭鶴羽山を最高峰とする山地と標高 273 m の南辺寺山の二つの山塊が存在し、そこを源流とする倭文川、成相川、三原川、大日川などの河川が淡路島最大の面積を有する三原平野を形成する。島北部はその大半を山地が占め、南北に貫く津名山地は標高 515 m の常隆寺山や 522 m の妙見山を最高峰とし、小さな起伏を持った緩やかな高原状の地形を呈する。山地の東西両側は急斜面をなし、山麓域には丘陵や台地、低地が存在するが、幅が狭く、大きな河川や平野の発達認められない。また、津名山地に連なる島中央部には標高 448 m の先山が位置し、南麓を流れる洲本川、千草川が大阪湾に向かって開けた洲本平野を形成する。島北部中央を南北に貫く山地は東西の海岸部を南北に走る断層活動が作り出した地形であり、これらの断層の境に存在する急傾斜の断層崖を境として東西の海岸沿いに比較的なだらかな丘陵地帯が広がる。一方、南北の断層と直行する東西に走る断層は山地を南北に隔てる地溝帯を形成し、それに沿って東西の海岸部を結ぶ交通路が走っている。このような淡路島本島において、淡路市は島北端から中央部を市域とし、島の北側 3 分の 1 を占める。明石海峡大橋を通じて神戸市と、明石海峡をはさんで航路で明石市と、市南部は洲本市と隣接している。市中央部には津名丘陵が走り、全面積の半分以上を山地が占める。調査地は淡路市の北東部、東海岸沿いの南北中央よりやや北寄りに位置する。

参考文献

淡路市教育委員会 『舟木遺跡 1 (B・D 地区の調査)』 淡路市埋蔵文化財調査報告書 第 15 集 淡路市教育委員会 2020 年

2 歴史的環境 (図 4)

調査地の周辺には、縄文時代から中世の遺跡が複数所在している。

縄文時代の遺跡として砂川南遺跡 (12)、寺田遺跡 (15)、船頭ヶ内遺跡 (16) が挙げられる。砂川南遺跡では平成 13 (2001) 年度の発掘調査において、主に縄文時代晩期の遺物を包含する堆積層 (遺物包含層) が検出されているが、遺構は確認されていない。遺物包含層から出土した土器は縄文時代晩期の所産と考えられる突帯紋土器が多数を占める一方、弥生時代前期まで下るものが認められることから、当遺跡は縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての時期に比定されている。寺田遺跡は遺物散布地で、縄文土器、サヌカイト片が散布する。船頭ヶ内遺跡では縄文

時代早期の押型文土器が出土している。

弥生時代の遺跡としては寺ノ上遺跡（2）、八王子遺跡（3）、高田遺跡（4）、砂川遺跡（13）、船頭ヶ内遺跡、トラズ遺跡（17）があるが、船頭ヶ内遺跡を除き遺物散布地である。船頭ヶ内遺跡では弥生時代後期の遺物が出土している。

古墳時代の遺跡としては釜口浜田遺跡（18）がある。平成7（1995）年度に実施された発掘調査では、遺構は検出されなかったものの、古墳時代前期から後期にかけての土師器、須恵器に比べ製塩土器が出土している。また、トラズ遺跡が奈良時代、釜口大田遺跡（9）、六條遺跡（14）は奈良時代から平安時代の遺物散布地として知られ、中世の遺物散布地として八王子遺跡、高田遺跡、大番田遺跡（5）、柳谷遺跡（6）、細井里遺跡（7）、森ヶ鼻遺跡（8）、釜口大田遺跡、原口遺跡（10）、岡遺跡（11）、砂川南遺跡、砂川遺跡、寺田遺跡が挙げられる。また、調査地から北西約240 mに位置する妙勝寺は日蓮宗の寺院で、建武三（1336）年、楠木正成、新田義貞に敗れた足利尊氏が九州へ向かう途中、船上から当寺の燈火を見つけ、「妙勝寺」という寺名を聞いて太刀一振を寄進し必勝を祈願したとされ、寺には尊氏直筆の書状が伝わる。

参考文献

吉井太郎 『伏柴雜記』 1933 年

暁鐘成 著 松川半山、浦川公左 図絵 『淡路国名所図会 卷之一』 1893 年

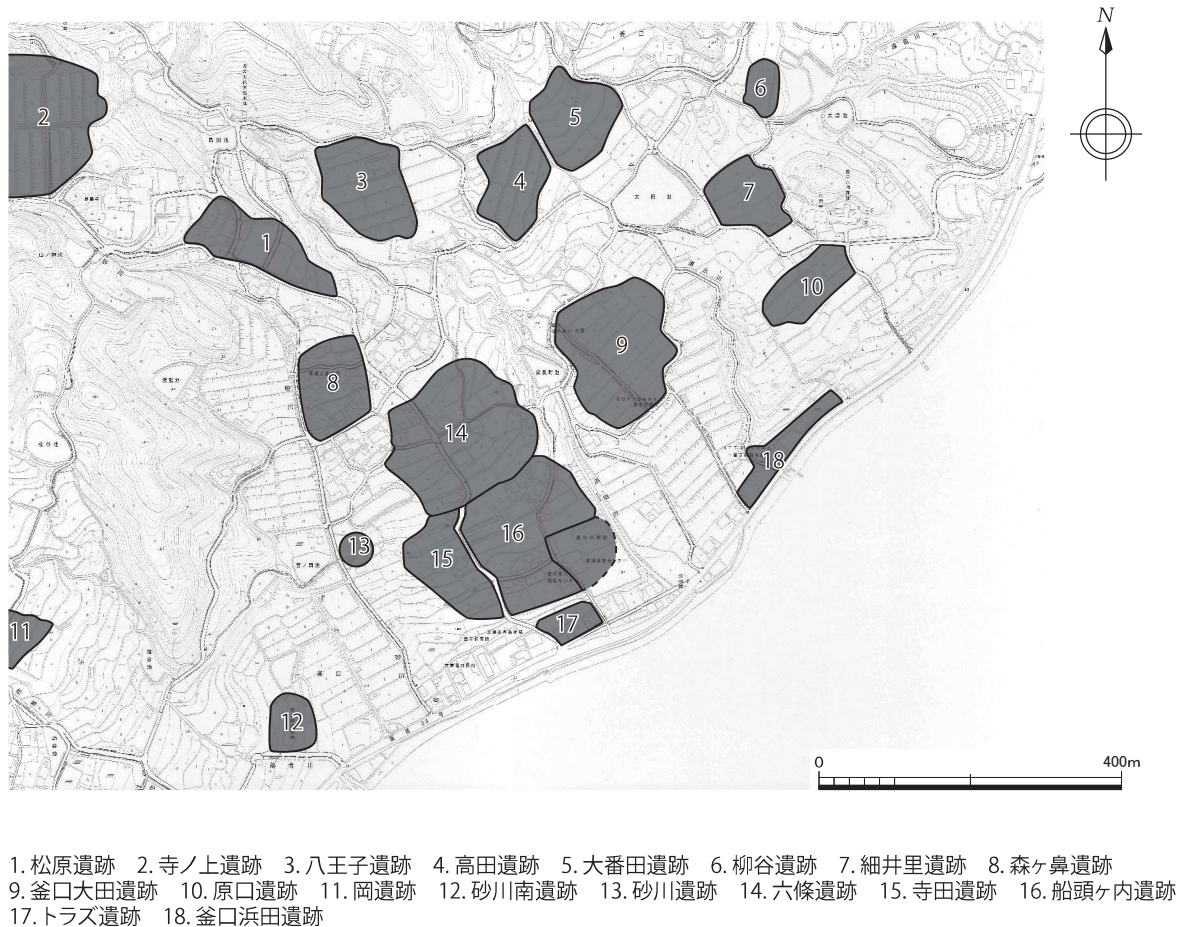


図4 周辺遺跡位置図（1：10,000）